13 百済の「檐魯制」から見た、九州（筑紫）王朝と近畿（河内）王朝の関係熟考?!

（１）九州（筑紫）王朝と近畿（河内）王朝の並立?!その視点でしか説明できない「応神」以降の歴史?!

先号（12）で述べたように、急がれる「応神」や「継体」の人物特定化ではあるが、残念ながら、まだまだそこまでには至っていない（ただし、「継体」については、ほぼ目星はついている?!→仇台系百済牟氏・軍君／男弟王→男大迹おおど王?!）！とは言え、彼らが活躍？した「空白の４世紀」「謎の５世紀」において、百済からの渡来・進出者（百済王族）が、当時の「九州（筑紫＋豊国？）倭国」を牛耳り？、宇佐（国）を橋頭堡にして？、その後近畿・大和に移動?!後裔である「欽明」達（「上宮王家」を含む）が、それ以降の皇統・近畿（河内・大和）倭国を形成していった?!おそらく、そのことは、ほぼ間違いないであろう（百済との関係、百済の情報、百済色の蔓延？は、そのことを如実に示している！）?!

したがって、そうであるならば、改めて、そこに展開された一連の史実？は、可能性としては、彼らの祖国？百済本国をも巻き込んでの、まさに「百済式檐魯たんろ国家」間の関係の推移、そして、諍いさかい、主導権争いの過程であったと言えるのかもしれない（その代表的なものが、「磐井の乱」「白村江の戦い」「壬申の乱」等？）?!

なお、「百済式檐魯制（→分国主義？）」とは、以前にも紹介したように（前シリーズ「古代史の旅35」等）、当時の百済の独特な統治形態とされるもので、進出・獲得した領土（「檐魯」）に血族（王族）を送り込み（その地の王とする！）、その国を分国化？するものであった！そして、そうした檐魯国家？間の王族の移動は（表面的には「人質」のような形式ではあっても？）、百済族全体の王権（王統）の継続と安定を保障するものであった?!

しかし、もちろんそれらは、最後には、近畿大和王権（倭国分国→日本国）に一元化されるわけではあるが（結果的にそうなった?!）、いずれにしても、ある時期（「応神」とされる人物の進出時期?!）から、いわゆる「倭国」自体も、その檐魯国家の一つとなり、その後、百済本国が滅びた 660 年以降は、（事実上本家筋？となった）九州倭国（王朝）と、そのまた檐魯国家としての近畿大和（王朝）が並立したということである?!その意味では、それぞれに、共有する（共通の？）歴史や要素（情報）が持ち込まれていることは当然であり、そのことを、単純な「二者択一」で選択、論争することは（気持ちは分かるし、そもそも分かり易いかもしれないが）、絶対に？真実を見誤ることにもなる?!

ただし、改めて「記紀」においては、そうした百済系の「檐魯国家間」の関係や諍い、主導権争いを隠蔽し、しかも、最後に残った？近畿大和王権の方からのみ（そちらの立場から）、全体の史実？を語っているわけであるので、なかなかその真相は見破られないようにはなっている?!それ故に、もし、上記のことが本当であるのならば、我々は、そうした視点（立場）を逆手？に取って、冷静に双方の動きや関係を見ていけばよいだけの話しとなる?!単純なことではあるが、一方の視点（言い分）だけで見ると、見えるものも見えない、あるいは結果が、まるで違うもの（正反対！）になったりすることがあるということでもある?!

要するに、我々は、卑弥呼・邪馬台国論争と同じように（文脈・テーマ自体は違うが！）、それ以降の「倭国王権」が九州にあった、否、近畿大和にあったという、まさに二者択一的な史実解明？を行ってきているのであるが（もちろん、そういうことを視野に入れていない人も、多々いるようではあるが？）、両者は共に、ある時期から同じ百済王族によって営まれてきた「檐魯国家」であり、その意味で、両者の歴史（認識）は重なっており、始祖の伝承や事績は共有されていたのではないかということである?!

（２）双方が、「倭国（皇統）」を名乗っていたということであれば、それは、百済の「檐魯」関係しかない?!

したがって、もし、そうでなければ、その時期の「記紀」の内容は、当時の編纂者達にとっては、直接は無関係な、しかし、何らかの意図をもたせた（少なくとも、一連の物語にはする必要はあった?!）、だが、全体としては、断片的な史実？（情報）を繋ぎ合わせた「寄木細工（物語）」か、まったくの創作物（物語）である?!しかし、流石に？、そんなことはありそうもない?!以前にも述べたが、まったくの「無」（空想？）からは、あのようなストーリー（物語）は紡ぎだせない?!否、却って「逆効果」となるかもしれない（滅びた国の末裔？が、別の国の王権を担っている?!したがって、ある意味それは、「簒奪？国家」ということにもなる?!）！つまり、「記紀」は、近畿大和王権の正統性・正当性に立脚したストーリー（物語）を構築はしたが、まったくの創作（捏造）ではなく、あくまでも近畿大和王権から見た、真実の？歴史の叙述を行っているということである?!

ならば、ここでは、その時期のストーリー（動き）を、改めてそうした視点から見る必要性が出て来るとともに、そうすることによって、これまで見えていなかった部分（これまでの分析・解釈、そして共有認識が停滞していた部分）が、新たに見えてくるのではないかということを、確認（主張）する必要が出てくる?!特に、ここで問題としている「応神（時代）」から「継体（時代）」、そして、「欽明（時代）」から「敏達（時代）」へと変遷していくプロセスは、まさしくそれによって、正しく認識できるであろうということである?!

例えば、その最も卑近な例が、周知の？「磐井の乱」であり、勝者とされた（正統とされた！）「継体」や「物部麁鹿火」の立場、あるいはその言動の意味である（前にも述べたことではあるが、これについては、多くの人が、その奇妙さ・不思議さを指摘している?!）！さらには、かの有名な、「倭の五王」の最後の「武」の、宋の皇帝への

「上奏文」（ただし、その文面は、別の百済関係史料とよく似ているという言説を、どこかで見たこともあるが）からも分かるように、（九州にいた？）「倭の五王」達は、当時の東日本（常陸）から西日本全体、そして朝鮮半島南部へと、その版図を広げていっていた（「檐魯」を至る所に設置していた?!）ということでもある?!ひょっとしたら、その象徴（証拠？）の一つが、例の「前方後円墳」の、朝鮮半島南部を含めた、全国的・広範囲な普及・展開だったのではないかとも思われる?!

こうした中で、九州（王朝）と近畿大和（王朝）の双方が、それぞれ「倭国（皇統）」を名乗っていたということであれば、もちろん、その関係（プロセスや関係する人物等を含む）を詳しく（正しく？）精査しなければならないが、その視点は、百済の「檐魯」関係しかないのではないか、あるいはその関係で、これまでの分析結果や情報が、ある意味無理なく説明できるのではないかということである?!

なお、私は、ここが一番のポイント（謎？）だと考えているが、その中で、多分？真相を握っているのが、（ある時期の）出雲・近江勢力（丹波・越？）の九州進出？であり、その先兵として派遣？された「神功皇后」（息長氏→息長帯比売）と「仲哀天皇」（その実は、「武内宿禰」→住吉大神？）、そして、その子とされている「応神」との関係だということである?!しかも、それは、多分？『魏志』の記載時（３世紀末）から消息を絶つ？、その後の（九州）倭国と、いわゆる５世紀の「倭の五王」の間の、まさに「ミッシング・リング」の期間なのでもある?!

（３）改めて、列島に創り上げられた「檐魯国家？」は、当時どのように存在していたのか?!

ということで、今、改めて私は、いわゆる「応神（期）」、そして、それ以降の我が国の歴史（８世紀初頭までの）は、半島西部から渡来・進出してきた「百済（王族）」系勢力によって創り？上げられたものではないかということを、真剣に考え始めているのであるが、その真相は、改めて、次のようであったと考えている?!

まず、紀元前18年に興った、北方扶余系百済（王族）には三つの系統があり、本来の本宗家である沸流系（余氏）は、475年に、その同族？高句麗に攻められ、（沸流系）百済としては、ここで一旦滅亡したが、その直前に、嫡子「兄王（縢）」（応神のモデル？。高良大社玉垂命？→武内宿禰に投影されている?!）が、母系でつながる？倭国・筑紫に渡来（進出）し、そこで、新興の貴（木・基肄）国に入り込み、後に「応神？」として、天日矛・息長氏につながる（と仄めかされている？）神功皇后・武内宿禰と共に？、近畿河内に移動していった（→河内王朝）?!ある意味、それらの勢力は、百済本宗家・沸流系（余氏）の末裔と言える?!

一方、百済本国で実質的な宗家（本家）であった温祚系（余氏）は、最初の百済滅亡の時（475年）、南に逃れ（→熊津）、最終的には「白村江の戦い」で滅んだ！その間、その血統を有する、倭五王の３番目の「済」が九州（筑紫）に呼び出され？、筑紫王朝（太宰府？）を継承し、爾来筑紫（九州）王朝が、その温祚系（余氏）の筆頭家？となった?! かの「磐井の乱」で有名な、「武」かもしれない？「磐井」は、その当主であった?!

もう一つが、仇台系（余→牟氏）で、いつの頃か、本宗家沸流系（余氏）から分かれて、遼東・遼西等に檐魯を広げていたが、温祚系（余氏）や沸流系（余氏）との関係・交流の中で、その血族を双方に送り込み（「人質」として？）、実質的に（実際は「仇台系」？）、その血統である武寧王（斯摩）が、本国百済・温祚系（余氏）を束ねたが、結局は、「白村江の戦い」で滅んだ（→事実上の「百済」の消滅！）。しかし、上で述べた倭五王の「済」の時、同じように「倭国」に送り込まれていた、仇台系（余→牟氏）の「男弟王・軍君→継体？」（及び兄の「昆支」？）は、倭国王（この場合は、豊国倭国王?!）となり（←磐井の乱）、その後、彼（ら？）は近畿（河内）に移動し、いわゆる「河内王朝」を樹立し、その後彼らの末裔達は、倭国全体を手中に収めた（→誉田山古墳・大仙古墳）！

ちなみに、倭国皇統は九州に残っていたが、「白村江の戦い」（の敗戦）を機に、温祚系（余氏）の天智（筑紫倭国皇統の一人！）が近畿（近江）に遷都し、倭国皇統は、事実上近畿に移った（→日本国）。その後、先に近畿に移動していた倭国王・継体？（←豊国倭国王）の皇統は天武に移ったが（←壬申の乱）、彼の死後、持統・藤原不比等等によって、父方の温祚系（余氏）の倭国皇統に変わり（戻り？）、改めて「倭国から日本国へ」の建国？となった（天照大神を始祖とする万世一系化）。

とにかく、このように見てくると、我が国の歴史（古代のある時期から）は、百済王族の倭国渡来・進出、そして事実上の倭国参画（簒奪？）→日本国建国という形で、創り上げられたものであるとも言えるのである?!しかし、繰り返すように、それは、我が国（倭国→日本国）が、（純粋に）他国である百済に、決して乗っ取られたものではなく、様々な状況、出自、関係をもって、列島に集散離合してきた「倭人（弥生人？）」達が、先住の「縄文人」達（これだとて、決して一様ではない！）と、ある意味渾然一体となって創り上げてきたものであることは、明白な事実である！そして、それが、まさに実際に起きたことであり、現実の日本の姿なのでもある?!それ故に、決して、偏狭なナショナリズムで、そのことを総括してはならないのである！

人々の移動が、それ自体はかなりの困難はあったであろうが、今のような国境もなく、自由に出来た時代にあっては、まさにそれが自然なのであり、（現在の）それぞれの関係諸国が、そのことをどのように受け止めようとも、史実は史実として率直に受け止めなければならない！よく、「関係が深かった」「交流が盛んであった」、あるいは「大きな影響を受けた」とかといった言い様がなされるが、（本当は?!）上述のようなことも、確かな事実！として、我々は受け止める必要があるのである！